

【帰国報告書】

国際食料情報学部国際農業開発学科 4年 岡田哲也

2017年8月17日～2018年7月28日まで世界展開力強化事業のプログラムを利用して、メキシコ合衆国チャピngo自治大学に留学しており、帰国したので以下に報告する。

《動機と準備》

入学当初から中南米農業への興味があり、長期の留学を考えていた。しかし農大が提供しているカリキュラム自体も非常に魅力的で捨てるのが難しく、派遣先で一農大生として恥ずかしくない基盤をしっかりと養成してから挑戦しようと思い、結果4年生時での派遣決定となった。ブラジル・ペルーの他3校と比べて一番自分が求めていることがあり追求することができそうだと感じメキシコを選んだわけだが、具体的には国全体としてメキシコ農業の地域・多様性(農用地面積、気候・地形、州の独立性)、国際貿易と国家規模の農業生産(NAFTA、アメリカ依存)、零細農民・先住民族の生活(南・南東部の小農、国内格差)の3点。大学の特色からは座学に実習が付随する実学的な講義構成と、学部・学科をまたいだ幅広い学びの実現性の2点を選択した動機の主だったものであった。その中で農学系インターンシップの実施、自身の卒業論文テーマの研究・調査、語学力の上達、現地友人関係の構築などの目的・目標を掲げていた。派遣決定後の準備としては、パスポート・海外保険・学生ビザ・予防接種・授業・アルバイトなどを進めながら、現地生活の核となるであろうスペイン語学習に重点を置き、文法の反復学習・定着と語彙数の増強に努めていた。

《授業履修・内容》

興味対象の学科・講義を重視して複数の学科の授業に参加していたこと、また卒業論文研究のため不定期で学外滞在をすることがあったことから、基本的には聴講という立場を取っていた。正式に単位取得に関わる授業を履修したのは1科目のみ。登録上は農村開発社会学科(Sociologia Rural)に在籍し、他に植物生産技術学科(Fitotecnia)、農業環境学科(Agroecologia)、語学センター(Centro de Lenguas Extranjeras y Autoctonas)の授業も受けていた。学科間の制約が少ない留学生ということに加え、渡航前に卒業に必要な単位をほぼ取得していたことがこのような形の学習を実現したと思う。一つの授業を履修すると座学・実習と併せて週に2～4コマ埋まるので、農大と比べるとかなり忙しい日々となる。どの学科の学生も毎日朝から夕方・夜まで授業や課題に取り組んでいる。土日は基本休みで、場合によっては遠方に研修で行くこともあった。各授業の内容は前後期通じて以下の通り。農村開発社会学科では Sociologia Rural、Taller de desarrollo rural、Desarrollo sustentable、Desarrollo de las estructuras agrarias en Mexico、Modelo de desarrollo の5科目。人類の発生や他生物との違い、生存目的などを哲学的な観点を交え

て学ぶこと、そして先住民族・小農の貧困という現状と、その発端となったり大きな影響を与えた過去の歴史的イベントや流れを学ぶことを基本として、メキシコ農業が抱える様々な農業問題を学生がテーマを持ち込んだり外部講師を呼ぶなどしてプレゼン・ディスカッション形式で展開されるものが多かった。何冊も課題図書が与えられ、会議やシンポジウムに同行することもあり、座学が学習のメインであった。実習としては隔週のペースで近隣のトラスカラ州との境にある San Telmo Tepetlaoxtoc という農村地帯に赴き、山岳植生観察とプルケ(国内特有の発酵酒)製造法の学習、マゲイ(リュウゼツラン)の実習(株の移植、枯葉・根の除去、各部利用法)などを一年を通して行った。植物生産技術学科では **Produccion de flores de corte、Frutales caducifolios、Produccion de oleaginosas、Produccion de hortalizas de hoja, tallo e inflorescencia** の 4 科目。花卉・果樹・油用・野菜に分かれ、それぞれ専門の教授の下で日々の座学とその知識を実践する農作業実習を行っていた。チャピング所有の広大な畑を主な実習地としており、栽培技術を重視した学科なので畑に出る機会がとても多く、メキシコの土地や栽培作物を体で感じる事ができたと思う。また、チャピングが位置する中央高地だけでは生産できない植物の栽培体系も学ぶために、およそ 1 か月半〜2 ヶ月に一度のペースで他州・地域に研修旅行に行っていた。これにできる限り同行したことで、よりメキシコ農業の多様性と地域特性を理解することができ、結果的に 32 州中半分もの州を訪れることとなった。特に印象に残っているのは後期末に 2 週間にわたってユカタン半島の各州(タバスコ・チアパス・カンペチェ・ユカタン・キンタナロー)を巡った研修である。マヤ系農村での農業ボランティアも含めた住み込み生活、各地農業技術普及施設・農地の見学などに加え、現地ならではの作物生産の実際を特に熱帯果実(カカオ・バナナ・パイナップル・サトウキビ・ランブータン・ドラゴンフルーツなど)に集中して学ぶことができた。半島の熱気と雨季による降雨で非常に蒸し暑かったが、所々で観光もできて貴重な時間となった。農業環境学科では **Policultivos tradicionales、Bases ecologicas de la agricultura sustentable、Tecnologia para el manejo agroecologico del agua y la energia** の 3 科目。伝統的なミルパと呼ばれる畑に代表される多種同時栽培のシステムや効果、環境に配慮した持続可能な農業に必要な要素、地域環境資源の利用技術などを座学で学び、水質や汚染の講義の際は実験室を利用したりもした。また学科独自の小さい畑を有しており、そこで有機的な作物栽培の実践を行っていた。堆肥などの有機肥料を自分たちで作ったり、学内のエコ活動や伝統農法・食事・医療などのイベントに積極参加することもあった。語学センターでは **Nahuatl**(ナワトル語)という国内最大話者数を誇る先住民族言語を学んでいた。講師がネイティブだったので発音の学習にはとても効果的で、メキシコ州内のナワ族との交流イベントも開催するなど刺激が多かった。後述するが、自身の卒業論文研究ではこのナワ族系の一農村を選定したため、単純な単語やフレーズだけでも現地住民との交流を深めるのに非常に役立った。

《大学生生活》

住居はキャンパスからすぐ近くにある Colonia de los profesores という、留学生・来校者・教授専用のシェアハウスのようなところで生活していた。費用は農大生の場合は無料だったが、他の学生は月に約 2 万円弱払っていた。一住居に三部屋あり、最大三人での共同生活であった。部屋にはベッド・簡易収納・机・椅子などがあり、その他のものは全て共用。全体的に老朽化が進んでおり、ガスが切れた際は自炊が困難で、冬にシャワーのお湯が出なくなった時は震えながら浴びた。また、一帯だけ電力系統が弱いので雨や雷、近隣住居の使用状況などで簡単に停電し復旧も遅かった。一方で学生寮に比べるとかなり広々としていて快適だったので、友人が多数押しかけて談笑や飲み会をするなど、社交場としての役割も果たしていた。同居人や隣人など他国籍の学生との交流があるが、お互いスペイン語が未熟だったり他国のスラングやアクセントもあり、メキシコのスペイン語との違いからかえってコミュニケーションが難しいと感じることがあった。だが大学がストライキで数週間休講になった際はフランス・アルゼンチン人たちと旅行に行ったりもした。食事は住居から一番近い食堂と一日二食(昼・夜)の契約をして利用していた。一食約 90 円とかなり安く、またおかわりは何度でも無料でできるようになっているので、学期中は経済的にとても助かった。毎週何かしら学内外で催しがあり、友人たちからの個人的な誘いも含めて積極的に参加していた。面白いイベントや彼らの暮らしぶりを体感するだけでなく多種多様な人々と関わることでスペイン語を聞く耳にも偏りが出ないようにした。独自の祝祭日や誕生日の時の過ごし方、伝統文化・音楽・食事、観光や映画、スポーツなど新たな経験・学びのある充実した余暇を過ごすことができていたと思う。

9月にチアパス、プエブラ、オアハカと大きな地震が頻発した際は、学内の有志で集い震源地からほど近い Hueyapan というモレロス州の被災地にボランティアとして赴いた。バスで大量の物資や食料を届け、倒壊した家屋の木材や瓦礫を運び出す手伝いもした。この様子は El universal という全国紙の新聞にもニュースとして取り上げられ、少しでも被災者の方々の力になれたことを実感した。

前期末にはチャピングで普段は日本語クラスを持っている穂積拓夫先生の付き添いで、プエブラ州の Tlatlauquitepec、トラスカラ州の Espanita、イダルゴ州の Mixquiahuala の農村部にそれぞれ日帰りで訪れ、バイオダイジェスターの普及活動の見学と補助を行った。家畜の糞尿由来のバイオマスエネルギーなので環境にも優しく循環可能で、炊事に使用することでガス代を抑え且つ薪などの伐採・運搬などの労働も節約することができる。また残渣を有機肥料として畑に利用することもでき、便益が多い優秀なエネルギーであることを改めて学んだ。大学から出る補助金を主な活動資源にしているらしく、ダイジェスターの構造やそうしたサポートも相まってかなり経済的な値段で設置することができる。家畜をそれなりの頭数所有していると言っても貧しい農民が多く、初期投資と耐用年数など考えると非常に住民の生活向上に役立っているようだった。現地の住民組織や別の地域団体と

協力してプログラムの推進・ダイジェスターの設置を行っており、より普及を広めるために時折プレゼンテーションなども開催している。生産に太陽光の影響を受けやすいバイオガスに関する農民の不安や疑問の声を多く聞いたが、丁寧な説明で理解を促す先生の姿が印象的であった。

また、市内で知り合った男性の住む San Jerónimo Amanalco という標高 2700m に位置する都市にも個人的に複数回訪れた。テスココ中心部からは 20km ほど離れており、片道約 100 円の乗合バスで 30~40 分の距離である。メキシコ州の中でも数少ない先住民族割合が高い地域であり、山の麓にあるため斜面が多く比較的寒い。土地はほとんどが畑か放牧地で、話によるとトウモロコシ・数種のインゲンマメ・コムギ・オオムギ・アルファルファ・リンゴ・モモ・ナシ・プラムなどを栽培し、家畜はウシ・ブタ・ヒツジ・ヤギ・ロバ・ウマを飼育しているらしい。宗教はカトリックだが町に面する山はトラロック (Tlaloc・4120m) という、アステカ文明時代から続く雨の神を祀る信仰の山であり、諸教混交の状況は面白かった。後日実際に登り、世界最高地にあると言われる山頂に残る遺跡を見ることができた。またこの地域は川や泉といった豊富な水資源が存在し、道には土地の高低に影響を受けることなく大小様々な水路が張り巡らされていて、乾季においてもそのほぼ全てにたつぷりと水が流れていた。山中に大きく豊かな泉があり、さらに低地に位置する別の大きな地域全体にまで水を通してということだったので、その豊富な水量は興味深かった。男性の紹介で別の日にテマスカルという伝統・宗教的なサウナを体験することもできた。これは魂の浄化を目的とした儀式的要素が強いものだったが、石組みの真っ暗なテントの中で焼け石によってどんどん上昇していく気温とそれに伴い盛り上がる音楽と歌、神聖な植物とお香・飲料、叫び声を上げてトランス状態になっている他の参加者の様子など、思い出に残る貴重な経験ができたと感じる。

後期末には今までのスペイン語学習の実力チェックとして SIELE という TOEFL のスペイン語版のような試験をメキシコ国立自治大学 (UNAM) のキャンパスで受けた。リーディング・リスニング・ライティング・スピーキングの 4 セクションを全てパソコンで実施する形は新鮮で楽しく進められた。特に準備もせずに臨んだのでありのままの実力を測ることができ、またこの学園都市は 2007 年に世界遺産に登録されており、学内の有名な美しい壁画を鑑賞することもできた。

帰国月には 10 日間の農業系インターンシップをチアパス州サン・クリストバル・デ・ラス・カサスの有機コーヒー生産者組合「Maya Vinic」で実現させた。現在の総組合員数 646、約 8 つの自治体、約 40 のコミュニティにまたがる成長中の組織である。主な作業・体験内容は組合員代表者たちの会議への参加、貯蔵庫兼選別工場の見学、雑草の除去、苗の植え付け、堆肥・有機肥料・害虫忌避剤の施用、組合員一家庭で住み込みの農作業(雑草・古枝の除去、堆肥作り、播種)、コーヒー豆販売店の店番、焙煎工場の見学、養蜂作業と輸出コンテナ準備の見学、カカオ豆(チョコレート)生産、カフェテリアでの接客業務な

どである。ここの組合員は全て先住民族系であり、サパティスタ(民族解放戦線)の武装蜂起の影響を受けて90年代に住民が虐殺された地域の生き残りの人達が、生活の糧をコーヒー生産と協業に見出したことに端を発する団体であった。そのため農村部へ出向いたときはほとんどの住民がスペイン語を全く解さずツォツィル語しか話せなかったため、やり取りに苦労した。豆の規格や評価基準、選別方法、取引価格、取引先主要国、有機農業認定機関の定期調査、組合内規定の制定案、品質維持の難しさ、悪質な組合員の存在と処分、新品種導入計画など様々な説明を受けることができた。

州ごとの所得格差が大きいメキシコにおいて、平均収入額が首都メキシコシティの住民の7分の1であるチアパス州は以前からその状況を知るために一度赴きたいと思っていた地域であったので、今回このような滞在・研修が実現してとても嬉しかった。チアパス州民の25%は何らかの形でコーヒー産業に関わっていると言われるが、今回お世話になった Maya Vinic はまさにそのような彼らを一つにまとめ、有機生産と高品質という付加価値も有する生産組合であり、成功例を分析するための良いモデルケースであると改めて知ることができた。農地は全て傾斜が急な土地に分散して所有されているため機械が入る余地などは無く、どんな作業も負担が掛かるが、その分農地内で播種、肥培管理(有機肥料生産)、収穫、消費、再生産が養蜂と自給用作物畑ミルパと互いに関わり合いながら、全てが持続的に循環するような仕組みが出来上がっており、その無駄のないシステムと手間暇掛かる作業から生み出された農産物が換金される時、確かな金額での取引がその価値を証明しているのだと実感した。

《卒業論文研究》

自身で情報を集め、プエブラ州の北部山脈に位置するチコンクアウトラ(Chiconcuautla)という地方自治体の Santiago Tlaxco という村を卒業論文研究の調査地とした。10月に初めて訪れたことを機に親しくなり、一家庭に受け入れてもらい帰国直前まで継続して訪問、計約60日間の共同生活を送り農村調査を行った。日本人が訪れたのは初めての出来事だったらしい。地理環境はテスココからメキシコシティまでバスで行き、そのバスターミナルから一番近い都市のサカトラン(Zacatlán)まで大型バスで約4~5時間、そこからさらに地元の乗合バスに乗って2時間という距離である。年間を通して雨が降り湿度も高い亜熱帯性の気候である。チコンクアウトラは人口に対する先住民族割合(ナワ族人口)が約84%と高いことに加えて、国内の人間開発指数が最も低い125市町村の一つに挙げられている。州内の217市町村の中でも7番目に貧困人口が高く(91.07%)、その貧困と地域孤立性の度合いに強い興味を惹かれた。村全体を歩いて地図を作成したり、農作業の手伝いをしたり、一軒一軒各家庭に訪問・質問する農家調査を行ったりした。詳しくは卒業論文としてまとめることになるが、小さく分散された傾斜のきつい農地、灌漑設備の欠如、住居や所有財産レベル、農業収入の低さ、公共サービスへのアクセス度、家族構成と

農作業動員度など、日々の暮らしに不都合や困難を生じさせる要素が数多く見つかった。しかしこのような貧困地域の様相を呈する一方、食料生産環境と食習慣の影響が肥満住民が非常に多く、このギャップには毎訪問時に驚きと共に注目させられたため、卒業論文のテーマとすることにした。現在域内で栽培されていたり自生資源を利用していたりするものの中から、健康状態を改善する効果を持つものを選抜しその利用を広めると共に、同じく肥満対策に効果的な新たな作物(高換金性・商品価値)の導入によって、農家の生活レベルも向上させる可能性を探りたい。それによって地域住民の食生活改善による健康寿命の促進と、儲からない農業という概念の改善、その結果現在危惧されている農業離れをも食い止め且つ住民の経済的生活も豊かにするという、諸問題の同時解決・好循環システムの構築という結論(仮説の追究)を目指す。

《感想・まとめ》

一年間は長かったようで、実際に振り返ると想像以上に時間が早く過ぎてしまったと感じる。計画や希望通りにいかずまだまだ努力が足りない焦燥感を覚えることが多かった。発熱や結膜炎、寄生虫による慢性的な下痢など体調不良が活動の妨げになることもしばしばあり、自己管理の不徹底さを痛感した。しかし、帰国直前まであらゆる物事を経験として吸収できるよう、様々なことにチャレンジすること、着実に努力を積み重ねていくことはできたと思う。日々の学習、友人たちとの会話により語学レベルは確実に向上し、交友関係に関しては帰国後も継続的にやりとりをする貴重な友人を持つことができた。国内を広く巡り見聞を広める機会にも恵まれた。目的の一つであった卒業論文研究は想像以上の収穫が得られた。もちろん楽しいばかりではない辛く苦しい出来事もあったが、他の物事では経験できない、留学生活においてこそ直面した数多くの問題・逆境が自分を成長させてくれたと心から思う。そして何より一日一日を新たな発見と共に前向きに過ごすことができた。この留学をサポートしてくれた家族・友人・教授その他全ての人に改めて感謝したい。